2014年09月04日 中日新聞 朝刊特集２面 17頁

備える 3.11から

地域と

被災者への公開インタビューでは、東日本大震災で被災した岩手県大船渡市の平山睦子さん(58)と宮城県石巻市の佐藤敏郎さん(51)、伊勢湾台風を経験した名古屋市南区の蟹江美根代さん(90)が当時の様子を語った。貴重な体験談はすべて一特別号」として編集、印刷され、イベント終了時に参加者に配られた。

岩手県大船渡市
震災直後 この世の終わり
平山 睦子さん(58)

大船渡市で被災。家族は無事だったが、自宅のクリーニング店が津波で流失した。被災後は、全国各地の震災支援者との交流にも力を入れている。

あの日、自宅の周りは、この世の終わりのような光景が広がっていました。揺れの後、急いで逃げ込んだ近所の建物の屋上から辺りを見回すと、家々は津波に漬かり、海から四百メートル離れているのにコンテナや船が近くを流れていきました。一緒に逃げた義母と娘とで「命があっただけでも…」と言い合いました。

三階付近まで迫った津波はその後、引き波で地面付近まで下がり、そのすきに高台へと逃げ、夫と落ち合いました。自宅は二階部分だけが離れた地で見つかりました。元の場所で砂だまりをかくと、食器が見つかり、懐かしくなって。

避難所では炊事や掃除の当番を率先し、忙しくしていました。親しい人もでなりましたが、あまり多すぎて悲しむ時間がなかったのかもしれません。

震災がもたらしたのは、悪いことだけとは思いたくありません。被災者同士の助け合いや、全国からの支援もありました。それは、きっと新たな絆や文化を育んでくれたはずです。

宮城県石巻市
津波が奪った 次女から涙
佐藤 敏郎さん(51)

石巻市大川小六年だった次女みずほさん＝当時(一二)＝を津波で失う。中学教諭。震災後、女川町で初の防災担当主幹を務め、今は東松島市で教える。

地震が来た時は勤務先の女川中にいて、すぐ生徒を高台に避難させました。子どもの命を守るのは教師の使命。みずほも当然、逃げていると思ってました。二日後、遺体で見つかりました。駆けつけると、大川小近くを流れる北上川の川辺でブルーシートに包まれてました。眼鏡が外れただけだ、すぐみずほだって分かりましたね。冷たくなって、泥をかぶってて、そのほおを、なぜか一筋の涙が流れた。「何で死ななければならなかったの」という無念の涙でしょう。

大川小の児童が避難を始めたのは、地震の五十分後。学校には体験学習で使う裏山があったなのに、校庭で待機させられた。八十四人が犠牲になりました。

震災後、女川町の主幹として防災に取り組みました。抜き打ちで避難訓練をしたり、対応マニュアルを一枚の紙に簡潔にまとめて各教室に張ったり。そうやって備えていれば、大川小の悲劇も防げた。みずほの死を無駄にしないためにも、取り組みを続けます。

名古屋市南区
伊勢湾台風の高潮 黒い壁
蟹江 美根代さん(90)

長寿双子姉妹「きんさんぎんさん」の故蟹江ぎんさんの五女。一九五九年九月の伊勢湾台風で被災、親類三人を失った。四四年の昭和東南海地震も体験した。

天白川の堤防近くの海抜ゼロメートル地帯に家があります。伊勢湾台風では高潮が真っ黒い水の壁のようになって迫ってきた。貯木場から流れ出た材木で大勢の人が亡くなりました。

近所の平屋に住んでいた一番上の姉とその子どもたちで「何かあったら逃げな」と言っとった。でも、台風が来たのは夜で、避難が遅れた。五十五年がたつけど、私らの悲しみは消えん。東日本大震災や今夏の広島の豪雨の被災者の気持ちがよう分かります。

毎年九月に地元の小学校で語り部をするんだよ。早めの避難が一番。逃げ遅れたら、とにかく家の中で少しでも上階に逃げる、と。無理に外に出て濁流にのまれるよりはましだって。

東南海地震の話もできるよ。戦時中で被害は隠されたんだけど、うちの近所の軍需工場で多くの犠牲が出たのを覚えている。昔の災害を知る人間として、日頃から、自分の住む地域の危険を知る備えが何より大切だとみんなに伝えたい。

❷非常用トイレなど防災グッズを見る来場者
❸南海トラフ巨大地震で予想される津波の高さを示す垂れ幕

シンポジウム会場のロビーに掲示された「備える」の紙面

❹紙で家の模型を組み立て頑丈な作りを学ぶ参加者たち ❺減災館で再現した揺れを体験する参加者ら

ズン 震度３を体感 名古屋大の減災館

名古屋大の減災館では、４階建ての建物全体を揺らす地震体験イベントがあり、市民らが震度３程度の揺れを体感した。「ズン」という鈍い音とともに建物が震動すると会場にどよめきが上がった。

大地震でパニックにならないようにと参加した名古屋市名東区の高鳥益治さん(76)は「建物ごと揺れる施設は初めて。貴重な経験でした」。会場には南海トラフ巨大地震で想定される津波の高さを示す展示も。愛知県豊橋市の看護専門学校生高野若菜さん(20)はメモ用のノートを手に見学し、「しっかり学んで災害時に役立てる看護師になりたい」と話した。

子ども向けの防災教室も開かれ、親子連れ約70人が参加。地震が起きてもすぐに気持ちを落ち着けられる呼吸法などを学んだ。

(c) .中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています